

吉川英梨

記念すべき第10回は、工作船資料館の話です。私が初めて訪れたのは、昨年(2022年)の3月9日……そう、海上保安友の会理事会の日です。(結局今週もまた、理事会の日の話題を引っ張っています笑)

船関係の方から「この資料館はすごい」と聞いていたので、念願かなっての入館です。しかし、私はこの日の午前中に理事会会場と間違えて入ってしまった場所。案内役の方に苦笑いで迎え入れられ、恥ずかしいったらありゃしない……なんて、顔を赤くしている間もありません。

目の前に錆をまとった不気味な船体が、大迫力でお出迎えます。こんなところで理事会をするわけないじゃん、と心の中で自分に突っ込んでいると、錆び

## 『自分ごと』に近づいた工作船資料館

ついた船体に空いたいくつもの黒い穴が、目に飛び込んできました。

不審船対応にあたった巡視船あまみが正当防衛射撃をした痕です。へらへらしていた私はしゃきっと背筋が伸びました。船体の殆どを錆が覆っていますが、もとは青い船体だったことがわかる、冴えるような青が、また生々しい。

実はこの平成13年の九州南西海域工作船事件当時、私は米国に留学中で、海上保安庁が北朝鮮の工作船と銃撃戦を繰り広げたなんて、全く知りませんでした。当時の米国は9・11から数か月後のアフガン攻撃真っ最中。テレビのニュースも町中も戦争一色、日本のニュースは一切入ってきませんでした。

私がこの事案を知ったのは、長谷川朝晴さんが再現ドラマをやったテレビの放送でした。

海上保安庁は日本の領海を守るためにこんなに危険な任務に就いているのか、と驚愕したの

一般公開されている北朝鮮の工作船。弾痕が生々しい



を覚えています。

不審船に積まれていたという数々の銃器、地对空ミサイルの展示にぞっとしていると、スーツ姿の男性が声をかけてくださいました。

確か、広報室にいらっしゃった海上保安官の方だったと思います。工作船事件のあらましまや、自爆沈没した工作船を引き揚げるに至った経緯を、丁寧に

説明してくださいました。

当日は何十人もの海上保安官の方と話をしたので、私はすっかりその方のお名前を失念してしまいましたが、なぜか、彼の耳の形だけはよく覚えていました。柔道経験者がよくなる、カリフラワー耳をしていました。

紳士な方でしたが、武闘派で強いんだらうなと想像していると、別れ際、彼がぼろっとお

しゃいました。「実は私、来週から海賊対応のため、ソマリア沖に派遣されるんです」

私の脳裏をよぎったのは、ついさっき見た、不審船に残る弾痕と、物々しい武器の山。無秩序に外航船を襲う海賊も、ここに展示されている不審船と同じくらいか、それ以上に危険な存在です。

「お気をつけて。無事帰っててくださいね」

私はこれだけを言うのが精一杯でした。

あの瞬間、「遠い海の向こうの出来事」として他人ごとのように捉えていた不審船事件もソマリア沖海賊船対応も『自分ごと』に近づいた気がします。

作家として理事として私にできることは、海上保安官のみなさんが担う危険な業務を、読者に『自分ごと』と捉えてもらうこと。そんな作家になれるよう、改めて決意した瞬間でした。

(つづく)

読者に伝えたい「危険と隣り合わせの海上保安官」